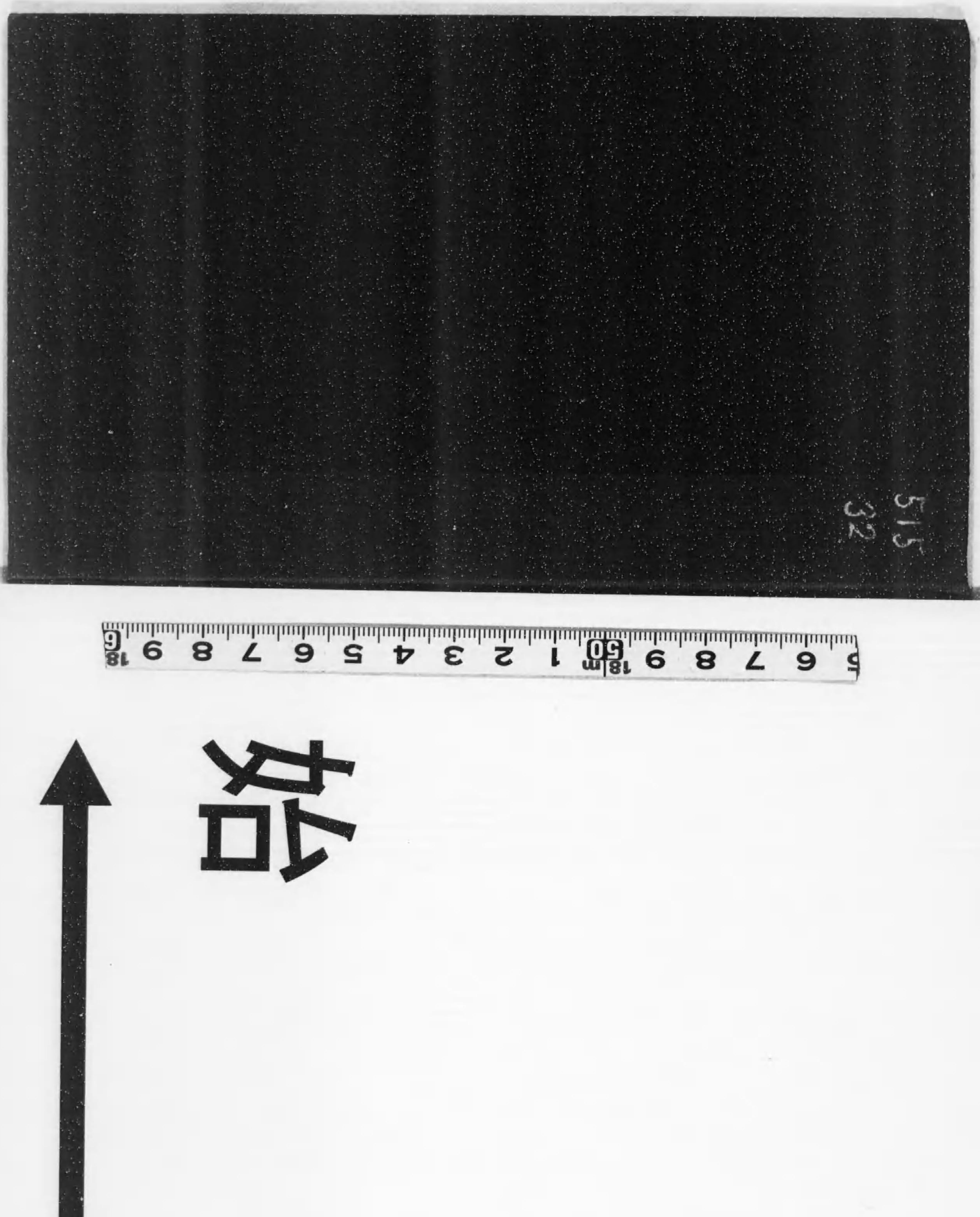
5/15
32
18cm
50
18cm
5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9
前

12823
175-32

思想常識

戀と愛の哲學

大正
12. 8. 28
内交

思想常識

戀と愛の哲學（目次）

一　戀と愛のはしがき……一

戀愛至上主義の流行――五六年この方――「愛」と「戀」――戀は狹く愛は廣し

二　愛に潤さるゝ人生「愛を中心として人生觀・宇宙觀」……七

近代文明の標語――希臘の「自由」羅馬の「平等」――猶太の「博愛」――愛の擴大――昧のない考へ方――純な愛からの出發――愛は氣まぐれか――愛の發生を進化論的に觀て――高等動物になるに從つて――全宇宙の愛の樂園化――愛に潤さるゝ世界――愛を觀ぬ厭世哲學――宇宙の創造進化――ベルグソンの「生の流動」――科學者の立場から――「愛」を以て宇宙を觀る――「愛」を失へる世界――科學臭を脫して

三　トルストイの人道主義……二五

人生の空虛に憫む――農民から得た思想――トルストイの信條――愛の理

想と實行——世界同胞主義の行者パウロとトルストイ

四　理窟はどうでも附く……七

——東西の「愛」の思想と戰爭——

カアライルは叫ぶ——正義の爲の戰爭——戰爭の爲の敬義變改——ウイルソンは云ふ——一抔氣嫌で殺人——墨子の非戰論——墨子の博愛主義——墨子の世界同胞主義——儒教のいはゆる「仁」——「仁」の解釋のいろ〳〵——孔子の愛と基督の愛

五　現代の愛の哲人……四九

——タゴールとロマン・ロオラン——

新生命を吹込まれた印度哲學——大自然との親和——宇宙の大靈と小さい我——愛による神人合一——犧牲を笑ふロオラン——英雄主義の勇士の踏む道——愛によつて滲透された眞實——無限のたふとさ

六　戀愛の歷史をたづねて……五八

——戀愛發達の歷史的觀察——

七　戀愛と新道德……七三

——エレン・ケイの戀愛至上主義——

專められた戀愛——戀愛觀の書換——戀愛ぬきの性的交渉——戀の發端——戀愛が複雜になつて來た——ギリシヤ羅馬時代の戀——女を崇め奉つた時代——「淸い生活」の矛盾——女も一個の人間として——戀愛の破產——女は男にならうとした——新しい性的道德の建設——時代は過ぎゆく

「自由戀愛」と「神聖な戀」——性慾の淨化・醇化——戀愛の高尙複雜性——戀愛中心主義の新道德——新道德と現代の撞着——自由離婚說——自由離婚說に對する反對——エレン・ケイの應酬——バアナアド・ショオの離婚再婚論——カアペンターの結婚論

欠

目次

思想
常識 戀と愛の哲學 目次終

二　愛に潤さるゝ人生

――愛を中心とした人生觀・宇宙觀――

近代文明の標語

ともすれば荒びやすき人生に、うるほひを與へるのが愛である。

ルソオ等に火蓋を切つた佛蘭西革命の旗印は、『自由と平等と相愛』の三語であつた。そして、それが直ちに近代文明の標語と云うてもよい。また、西歐の古代文化の生んだ思想の三大潮流の特色を其儘云ひ表はしてゐるやうでもある。

希臘の「自由」・羅馬の「平等」

ギリシヤの文明は『自由』を尊ぶ思想を生んだ。知的にして獨立心に富んだギリシヤ人は、まづ自然に克ち、人間が凡ゆるものを征服して、何物の拘束もうけない自由の生活に憧れた。

羅馬の文明は『平等』の思想を生んだ。社會とか國家とかいふ組織に長けた羅

欠

馬人は、お互の權利義務的關係を、法律の上で不公平なく保たうとした。法律とか政治とかいふ社會文化の第一の萠芽はこの國に生れた。

希臘に哲學、科學、美術が興り、羅馬に法律、政治の學が發達したことに見ても、この特色が分る。自由と平等、それは希臘羅馬の文明が生んだ古き歴史に培はれた標言だ。自由も平等も、人生の要求ではある。けれども、自由平等と云つただけでは、どうもゴツ〳〵し過ぎる。云はゞ血も肉も取り去つた骸骨のやうな感じがする。『吾等は自由の空氣を吸ひ平等の權利に生く』と威張つて見たところで、味も素氣もないやうな氣がする。ミルクも茶もなく、パンのみを嚙つてるやうな氣分だ。

猶太の「博愛」

このぎこちない味氣ないガツ〳〵した叫びに、博愛の二字を織込んで、人の心の妙奥を刺し、東洋流に云へば人情の機微を捉へたところに、理窟を通り越した

力強さがある。

この『博愛』の思想を高潮したのは猶太の文明だ。『口に云へば、基督の教へた博愛主義の道德だ、愛の哲學だ。猶太文明の精華である基督教は、實に西洋文明に最高標準の道德を與へた。高さに於てばかりでなしに、深さに於ても廣さに於ても、大きな拔くべからざる思想感情を植ゑつけた。『おのれの隣人を愛する如く爾の敵を愛せ』といふあの基督の言葉ほど、如何にも力強く深刻に、そして汲んでも盡きぬ無限の廣さを持つた標語は他に求め得ない。人類の歴史三千年の間に、唯一つの選ばれたる言葉と云つてもよい。電車の標語募集などでは出て來ぬ。あの言葉によつてその一般を知り得る、世界全人類に共通な博愛の觀念、世界同胞主義の道德を與へた爲基督教の恩澤は實に廣大なものだ。若しあの道德がなく、あの思想がなかつたなら、希臘羅馬の文明も、遂に世界文明の進歩に何等貢献するところなく亡びて了つたであらうとは、文明批評家の口を揃へて云ふと

ころだ。

愛の擴大

『自由と平等と博愛』この三語は實に現代文明を導く標語でもあるが、これを歴史的に觀ると、希臘の自由、羅馬の平等、猶太の博愛と、この古代の三大文明の精髄を拔いたものと云つてよい。

甘きを求むる子供に、菓子を與へる母の行爲は愛の發現だ。その食傷を怖れ、自分の心を制して、與へ過ぎぬやう自ら嗜む母の行爲は、更に深められ洗練されたる愛の發現だ。親子の愛が一族一門に廣がり、隣人に及び鄕黨に廣がり、部族に廣がり國家に及んで愛國心といふやうな言葉が生れる。それが、民族に廣がり全人類を包擁し盡すに至る。愛の擴張は停まるところを知らない。心なき禽獸草木にも及ひ、宇宙の森羅萬象にも及ぶ。空間的に廣がるばかりでなく、過去に及び未來に及ぶ。

味のない考へ方

『文明の進歩は、人間が自然を征服し或はそれを所有し、發明し、改造する力によつてばかり圖ることは出來ない。お互の愛の深さ、同情の廣さの發展に伴はねばならぬ。』とダゴールが云つてゐるが、一方から云ふと、近代人はなんでも自分本位物質的本位にのみ考へる傾向があり、凡ての事を物質的に取扱つて行く科學的な傾向にそれが助長されて、人間の心から湧き出る純な愛情といふやうなものの力を、殆ど認めまいとする傾向がある。發明や改造といふ、人間の物的方面に働く力の進歩のみが、文明の進歩を形造るものだと考へる。さういふ大きな問題でなくも、はやい話が、日常の社會生活でも、誰かゝ物をくれると、彼は何か爲にするところあつてそれをくれたといふ風に考へる。はなはだ味がない。或はさういふ心持でくれたのかもしらんが、さうでないかもしらん。

純な愛からの出發

自分の慾望を滿足させるため、自分の爲に何かと活動することは、人間でも動物でも變りはないが、と云つて一から十まで、さうガツ〳〵した考へからばかり出發するとは限らない。時には自分の利害を外にしても、他人他物のためにならうといふ、純な愛から出發する場合もある。他人が苦しんでるのを見て、自分自身が苦しいやうな感じを起し、ひとの悲しいことを聞いて自分も悲しくなり、その苦しみから逃れさせようとして、己れの利害を忘れて活動することもある。況や、それが他人でなく、自分の身内の者などに對しての場合だと、日夕に起ることだ。

愛は氣まぐれか

この、愛とか同情心とかいふやうなものは、一體氣まぐれに變則的に起る現象だらうか、それとも、生命の底から流れ出て來る要求であらうか。フラ〳〵とした出來心か、それとも、しつかと生の奥に源を持つてゐて、そこから流れ出て來

る當然のものか、といふやうな問題がこゝに起つて來る。

近代の學者は、それを進化論的に究め、極く下等な動物時代から、それがだんだん發達して來た經路を見て、決してフラ〳〵のもの氣まぐれのものではないとする。生物本然の目的から生れたのだとする。

愛の發生を進化論的に觀て

肉體を八裂にされても一向痛痒を感せず、裂かれた八つの部分〳〵が、暢氣にもまた單獨に一個の生物として生活を續けて行く程度の原生動物でも、心理作用はあるとされてるが、神經系統が出來てないから、奴等の間に愛の働きがあるかどうかは、人間の眼には分らない。けれども、ヒトデやウニのやうな射出動物や、貝類のやうな軟體動物になると、すでに官能器官が出來てるから、意識を以て働いてる樣を觀察することが出來る。或種類の軟體動物は、その卵を生みつける場所を、乾度一定の處に選ぶ。それが既に自分の種屬に對する愛の發現だと說明さ

れる。また蚯蚓や昆虫や蟹や蝦のやうなものになつて來ると、なか〳〵鋭敏な感覺があり、意識もはつきりして來、兩性の區別もついて來る。それで、兩性間の相思の情といつたやうな心理が立派に發展して來てゐる。

殊に蟻や蜂のやうな昆虫になると、單に夫婦や親子の關係ばかりでない、團體的生活を營んで、勞作にも協同で當る。同じ穴の一匹の蟻が外へ出て怪我でもすると、同屬のものがそれを擔つて介抱しながらつれて來る。それが他の穴のものだと、見つけても打つちやつて顧みぬといふやうに、一種の民族主義が彼等の間に出來上つてる。尤もこれは人間がするやうな、自意識的のものでなく本能的のものであることは云ふまでもない。

高等動物になるに從つて

更に進んで脊推動物になると、この愛の現はれがだん〳〵進歩して來る。魚などでも、すでに性的の感情が著しく發達してゐる。鳥などを見ても分るが、更に

哺乳動物と進んで來るに從つて、小供の養育期がだん〳〵長くなる。それが長くなればなるほど、母親が餘計面倒を見ることになり、終ひには子に對する愛情が母の生命となる。動物中で、子供の養育期の最も長いのが人間で、從て母の愛の最も深いのも自然の理だ。母の愛のみでない或種の魚類になると、父親の子に對する愛も出來て來、母を失つた子に對しては、母に代つて父が子を育てるといふやうな例を見る。

つまり、進化論的に愛の發達を見ると、最初は本能的に子孫の繁榮に向けられ、それから性的の關係になり、所謂家族的になる。それがだん〳〵高等動物になるに從つて、ます〳〵深くなると同時に廣くなり、一門一家から一族一團に及んで來る。鷄などでも、隣りの鷄が何か兇變を傳へる如く叫び出すと、その隣りの鷄も一緒になつて鳴く。豚や羊に至つては、一匹叫び出すと忽ち一群に擴がり、そのうちの一匹でも殺されやうものなら、全群が騒ぎ出す。象や猿に至つては、殆

と人間と同樣な愛の心理がある。

全宇宙の愛の樂園化

人類も、その昔の原始時代には、動物と同樣家族や同族間の愛情しかなかつた。他族に對しては常に仇敵視した時代さへあつた。それがだん〳〵集つて國を成すやうになり、愛國主義とか民族主義とか言葉で現はせる程度に發達し、今日になつては世界全人類を同族と見、互に進んでは同胞と見る世界兄弟主義にまで發展した。而も單に人類間に止まつてゐず、他の生物死物にまで及ばざるを得ないことになつた。つまり、愛に依て惠まれたる一族一門の樂しき生活を、もつと擴げて部族とし國家とし世界とし、更に宇宙に擴大して全宇宙を以て愛の樂園化しようとする思想を生むに至つたのである。

愛に潤される世界

愛を說く哲學、宗敎は、人生に明るみを與へ潤ほひを與へる。哲學者も宗敎家

も、先づこの全宇宙がどうして出來、どういふ原理原則に支配されてるかといふことを問題にし、基督敎は此世を神が造つた、此世は神の愛の發現だとし、その愛は凡てのものをゆるし、凡てのものを受け容れる廣大無邊な全宇宙的な愛だとした。だから、その神の懷に入り、その神の惠みを祈つてゐるならば、その人々には盡きざる愛の泉が與へられ、全人類がさうなるときに、溫き天國が此世に實現されるとなした。

佛敎は佛の慈恐に縋れと說く。その佛の慈悲は、とりもなほさず基督敎でいふ神の愛だ。宗敎は凡て此世の苦しみや悲しみ乃至汚れから人を淸く樂しき社會へ救ひあげようとする目的に生れる。どこへ持つて行つたら、最も幸福な處へ安住せしめ得るかと云へば、愛の溢れる溫かき懷を思はざるを得ない。基督は神を指して吾等の父と呼んだ。父は凡てを許し、子の善惡を超越して憐れみ慰めてくれるであらう。つまり宗敎の行き道は、現世の大悲觀から出發して、それを全宇宙

の支配者の温かき愛の樂園へ向はしめるといふ大樂觀を以て大團圓としてゐる。

愛を觀ぬ厭世哲學

厭世哲學のショペンハウエルは、宇宙を意志の働きとした。凡ゆるものが、生きようとする働き以外に何物もない、自分が生きようとすると他を排さねばならぬ、生物の生きむとする意志、それを發揮すればするほど、此世は慘憺たる戰ひの巷となり、限りなき生存競爭の苦しき連續を見るのみだ。といふ風な立場から結局此世を暗いものとした。

彼は愛を說かなかつた。生きむとする力の發現の一方に、互に愛しいつくしむといふ心の發展を見なかつた。そこに彼の厭世哲學が生れた。けれども、ショペンハウエルの哲學に浸り、その中に惱みぬいたトルストイは、二千年前の單純な愛を說いた基督によつて光明を見、彼の積極的な人道主義をそこに建設した。

宇宙の創造進化

今日の科學的知識の發達した時代には、神樣が恰度藝術家のやうに、自分の愛を象徵するために、宇宙といふ大藝術品を創作したといふやうな、宗教的な考へは通らない。この宇宙の外に別に神といふやうな超然たるものがあつて、その力でこの世の中が團子を捏ねるやうに造りあげられたと云つても、誰も承知する者はない。宇宙はそれ自身の中にある創造力で、自分自らだん〳〵變化し發展し、無限に進化して行くものだ、といふことに近代の哲學は歸結してゐるが、それならその創造進化の原動力となるものは何か、といふ問題が次に起つて來る。ショペンハウエルは之を、生きむとする意志だとし、ヘイゲルは理性の力だとし、ニイチエは力を得むとする意志だと叫び、近くベルグソンは之を生の流動だと云うてゐる。

ベルグソンの「生の流動」

ベルグソンの哲學を創造的進化の哲學と云ふが、つまり、宇宙は初めから完全

に出來たものではない、刻々に移り刻々に變り、常に何物かを創造しつゝ進化して來たものだ。その歴史は長い、今も尙その進化の流れの上にある。將來何處迄もそれが續くといふので、宇宙を一箇の生命と見る。果してベルグソンの云ふ如く、宇宙は初めから一つの生命ある流れであつたか或は生命のない流れからだんだん生命に進化して來たものか、その點は俄かに判斷することが出來ないとされる。

さういふ風に、宇宙を一の渾然たる進化する生命と云つたやうに見るのに反對してるのは、ゼームス一派の實際主義の宇宙觀だ。事實、宇宙は初めから渾然たる一つのものとして、統一ある活動を續けてゐるものではない。雜多な異分子が無限に相接衝してその間にだん〳〵調和統一を作りつゝ進化して行くものだと說く。

科學者の立場から

哲學者が斯ういふ風に、宇宙創成の根本をかれこれ考へてる一方に、科學者はまた、その實驗の立場から、次のやうなことを說く。一體元素といふものは、どれでも二つ三つ乃至それ以上の違つた性質のものが相抱合してゐる。たとへば水素一と酸素二と化合して水の一分子が出來る。之は兩者相合して出來るといふものではなく、普通水といふ分子として自然に抱合して存在するものを、人工的に分解して見るので、宇宙の萬物は一として二つ以上の異成分が抱合しないものはない。純元素といふものが、孤立して自然に存在するといふことは例外の場合だ、と科學者は主張する。かういふ實驗から、これを宇宙觀に擴げて云つた說もある。ずつと昔では、この抱合の力を親和力と云つて、その神秘の力をたゝへたエムペトグレスの如きは、宇宙の根元を以て愛の力に歸した。近くは獨逸のヘッケルの如き、この化學的親和力を推擴げて、生命の原動力として愛を說かうとしてゐる。けれども、親和力のやうな單純な現象を以て、幽玄複雜な人間の愛を說

明することは難かしい。

「愛」を以て宇宙を觀る

けれども、逆に愛といふものを以て、この宇宙を觀る行き方になると、容易に總ての説明がついて來る。眼のあたり見るところの總てのものが、皆愛の力を發揮してるとも云はれる。愛を以て宇宙進化の原動力となす人は云ふ、『愛の結合力は星雲を凝集して日月星辰を造り、一層堅く結合しては地球となり、茲に物質の化合に依る一形體を成した、之が重力の作用に依て太陽の周圍を廻り、太陽はまた他の大なる恒星の周圍をめぐると云はれてゐるが、此重力引力の關係も矢張り一種の愛の力ではないか、愛は互に結合し融合せむとする相思の力だ。』

かうして出來た地球に、自動的に動く生命の一つ〳〵が發生したのは、引力や親和力の一層進化したものである。單細胞動物のバラミシウムといふ小さい虫の如き、自分が老いてもう繁殖が出來ぬやうになると、他のものと抱合して二つが

一つの虫となり、そこにまた再び若返つて盛んに繁殖を行ふといふが、かういふ顯微鏡で見る原生動物に於てすら、愛の現象は著しく進化してゐる。單純な引力や親和力では説明の出來ない程度に進化してゐる。

「愛」を失へる世界

「進んで環節動物や單殼動物になると、兩性愛から同族の愛に進み、孤獨では生存競爭に勝てない。」愛のあるところには萬物榮え、愛衰へて萬骨枯る。枯れなんとする一鉢の朝顏、持主は之に一杯の水を注いでその生命を恢復する。愛あるが爲めである。戰亂相次いで起れば、百萬の死屍野にさらされる。愛の失はれた爲めである。愛は他と共に生きむとする個性發展の必要條件だ。一方に自我の觀念が强くなればなるほど、一方に他と融和共同しようとする愛の力が强くならねばならぬ。愛の力は生命の一層複雜、深刻、靈妙な發展を可能ならしむる創造力であつて、生命の流動に若し愛の力が加はらなかつたならば、强食弱肉の競爭が

一層激烈になり、個性は孤立して其眞意義を失ふるに至るだらう。」

（帆足理一郎氏「愛の創造力」より）

科學一點張で宇宙人生の事悉く物質的機械的に分析し解剖して見た、科學的の收獲でなければ、一文の値打もないとされた科學熱に浮かされた時代は過ぎた。哲學者は寢言を云ふ夢想家とされ、哲學者自身も亦科學者カブれをして、凡て物質的機械的に物を解剖し分析する行き方になり、精神方面のこと、われ〳〵の直覺による洞察といふやうなものが、てんで相手にされなかつた十九世紀の科學熱時代から、最近ではまた再び昔の哲學主義にかへり、今度は反對に科學者自身が哲學的思索に首を突つ込むといふやうな傾向になつたといふことは、此叢書の隨處に詳說したが、ベルグソンの哲學の如きは、その科學から哲學へ、再び世界の興味が立戻つて來てからの產物である。

科學臭を脫して

人生の幽玄複雜なことが、冷い科學の解剖刀だけでは埒が明かない。だん〳〵行き詰つて來、此世が暗くなつて來る。われ〳〵は、科學者が取扱ふ處の細胞の塊としてだけ見られたのでは滿足が出來ない。いろ〳〵の元素が集つて此身體を成してゐることは納得するが、もつと、さういふ物的の解剖的說明だけでは、滿足の出來ぬ心の働きといふものもある。人間を單に物質扱ひして來た唯物的の思想、科學に抑へつけられた哲學が、人生から理想を奪ひ、結局哲學そのものゝ存在の價値をすら失つたのは自然の道行きだ。オイケンの精神哲學やベルグソンの創造進化の哲學が世に迎へられ、人生の理想に向つて努力するといふ光明が見出された。けれども、まだそこに科學から脫けきらないうらみがあるとされる。

帆足氏の說く如く、所謂創造的進化といふやうな、潤ほひのない說の上に愛の潤ほひをつけ、もつと人情的に微妙な心の働きを注ぎこまねばならぬとする。宇宙の根柢は、眞理だの物力だの物質だのと、そんな非人格的な理窟や法則を云々

することのみが、哲學の役目ではない。人生を機械視し、道具視し、方便視する哲學は、古き功利主義時代の哲學である。

我等は再び古へを顧み、そしてロマン・ロオランやトルストイやタゴールと共に愛の哲學を繰返さねばならぬ。

三　トルストイの人道主義

人生の空虛に惱む

近代の最も偉大なる煩悶家はトルストイである。トルストイの偉大なるは、文豪としてでもなければ一個の思想家、哲學者、宗教家としてゃもない。眞面目に痛切に、人間の苦しみを苦しみ拔いた一個の人間としてである。彼の半生の文人としての生活は、かなり大きな收獲があつた。また彼には土地があり金があり、貴族の地位もあり、此世のすべてのものを有つてゐた。けれどもそれが何になる。トルストイに取つてはそれ等のもの何もかも無意味であつた。

『戰爭と平和』の大作を終つてから、彼は人生の空虛に苦しんだ。ショペンハウエルの哲學に耽つたのも此時代である。『私の信ずるところに依れば、ショペンハウエルは人間の中で最も正直な人だ』と彼は讃歎した。ショペンハウエルは彼に、

此世の暗き一面を見せ死の福音を囁いた。けれどもトルストイは其儘厭世哲學の前に死ぬことの出來ない強い人間であつた。そして最後に救ひを愛に見出した。

農民から得た思想

露西亞の貴族階級に愛想を盡かしたトルストイは、淳朴な農民の間に、人間の貴き愛を見出した。彼自身も亦不思議に深い愛を農民に對して有つてゐた。富からも知識からも、凡てから除外されてゐる幾百萬の農民が、たゞ極めて單純な信仰に依つて其生をつないでるのを見出した時、露西亞の壓制政治の下に凡ゆる自由を奪はれた彼等が、宗教に依て生きてゐるのを見たときに、彼の人間味に乾いた心が、不思議な感動を受けた。トルストイは云ふ『私の一生の中で、私に最も大きな影響を與へ、私の心を富ましし、私の世界觀に解決を與へてくれた二人の思索家がある』と、その二人の思索家とは百姓で、その一人は極めて無教育の石工であつた。中央亞細亞生れの、悲慘な境遇に置かれた此石工は、絶望の底から熱

心に神を求めた、そして、宗教上の儀式や社會の私有財産制のやうな、一切の形式を否定し、納税を拒み兵役をも拒んだ。すべての人は皆兄弟だ、戰をする必要がないと云つて彼は兵役を拒んだ。或人が眞理を彼に訊ねれば、眞理とは愛だと答へる。トルストイの到着した解決も、眞理とは愛だの一語に盡きる。

トルストイの信條

トルストイは、基督の山上の説教を土臺として次のやうな戒律を立てた。

一、怒る勿れ、出來るだけ汝の怒りを抑へよ。

二、姦淫する勿れ、汝が一たび共棲した女を忠實に守れ、そして情慾を誘ふ凡ゆる事から遠ざかれ。

三、誓ふ勿れ、誓ひを以て汝の手を縛るな。

四、惡に依て惡に抗する勿れ。

五、汝の敵を愛せよ、決して裁く勿れ、他人を法廷に立たして責めるな。

彼の無抵抗主義が此處にある。抵抗するな絶對に爭ふな、そればかりでなく、更に積極的に汝の敵を愛せといふ、基督の世界同胞主義を現代に活かし、凡ゆる人に實行せしめようとした。凡ての人が求めて止まぬところの人類の最大幸福といふものは、人間がお互同志完全に協同し一致して行く人でなければ、他の如何なる方法を以ても得られない。といふ主張の下に、彼は新人生建設の爲に異常な努力をした。

愛の理想と實行

はじめは敎會に通ひ、忠實な一信者として熱心にやつてゐたが、敎會の信仰は彼にとつては迷信に過ぎなかつた。彼は彼自身の宗敎を立てるより外はなかつた。ために敎會からは破門された。

彼は『神を愛せよ、汝の隣人（人類）を愛せよ』といふ信條を直ちに實行に移さうとした。そしてその實行に躓いた。彼の果てしのない晩年の苦悶がまたこゝ

に生れた。彼の信仰は、たゞ己れ一人をよくすることではなく、また漫然と心の中に空想的に描いてゐるやうなものではなかつた。直ちに實際に行はねばならんやうな信條であつた。

帆足氏の如きは『トルストイは恐らく基督以來の最大の偉人だ、彼は單に思想上の偉人であつたばかりでなく、實行上の偉人であつた。彼は露西亞の腐敗した貴族社會に生れ、罪業の羈につながれ、邪惡の深淵に投入れられしも、なほ彼の止み難き精神的向上の一念は、彼をして單純な、百姓主義、平民主義、博愛主義に復活の曙光を認めしめ、奮鬪し惡戰して、八十幾年の長生涯を血と涙とを以て送つた、人道の勇士、理想の熱求者として彼の如きはなかつた。』と云つてゐる。

世界同脫主義の行者パウロとトルストイ

更に語を進めて云ふ、トルストイの唱へ且つ實行した人道主義なり平和主義なりといふものは、みな基督の敎へを受けついだものであるが、同じく基督の愛を

説いた人でも、基督を神として崇拝したポウロの宗教と、人間として崇拝したトルストイの宗教とを比べると、そこに爭はれない時代精神の相違がある。トルストイが理智の人であり、パウロが情熱の人であつたといふやうな事から來た相違ではない。トルストイに一家の哲學があつたやうに、パウロにも一厨議論じみた神學があつた。パウロを以て基督の宗教を承け繼いだ唯一の宗教的天才といふことも出來ない。トルストイは二千年間進歩發達して來た哲學や科學を振り棄てゝ古き歴史的人物の基督の偉大を認め、その單純な愛の福音を以て、人生絶對の眞理とし、之を我身に實行し、我に實現せむと努力した。その努力奮闘の偉大なりしことは、決してパウロの世界的傳道に優るとも劣りはしない。

そして共に基督の偉大なる人格に啓發されて、力と熱との荒まじき奮闘の姿を我等に示してゐるのは二者同一だ。たゞ時代の違ひは、パウロをして基督を神と思はしめ、トルストイをして人間の最も偉大なものと思はしめた。前者は神の子

なるが故に、その力に依りて我等は罪より救はると思ひ、後者は完全な人格なるが故に、我等の生活の伴侶とし道友とし模範とすべしと思うた。

かういふ風に、トルストイはパウロにも比べられる基督の行者と云つてもよい感がある、一體、人性の苦痛に煩悶懊惱した人の行き着く處は、宗教的な愛の哲學である。それに、トルストイには、東洋的な精神的傾向があり、西歐の物質的工藝的方面に對して、常に反感を抱いて居つた。その間に發達して來た教會といふものに對しても反感があつた。彼が原始基督教の思想に趨つた所以もそこにある。

四　理窟はどうでも附く

――東西の「愛」の思想と戰爭――

カアライルは叫ぶ

『茲に三十人の英國の勞働者と三十人の佛蘭西の勞働者とが、戰場に引ずり出されて相對陣する。打てといふ號令の下に彈が飛ぶ。勤勉なる六十の勞働者が、一瞬にうたれて六十の死屍が横はる。而もどれだけの人が同情の涙を注ぐ、彼等同志に何の罪があつたのか』と、カアライルは叫んでゐる。

愛の福音を裏切るものは戰爭だ。人類の最大幸福が、愛を基礎とした統治の下にのみ得られるとする哲學の常に逢着する問題は、この殘虐な戰爭だ。文明は戰爭を無くすると思つてゐたのも夢だ。野蠻な時代の、民族敵視時代の戰爭は、朝に夕に行はれても、その慘禍は今日の戰爭の如く大裟裟なものではなかつた。人一人を殺すにも隨分骨が折れたものだ。文明の戰爭は堂々たる男子を幾千幾萬と

蟻の子を踏みつぶす如く殺戮する。

正義の爲の戰爭

こないだの世界戰爭はどうだ。些々たるセルビヤ事件を云ひがゝりにして、世界同胞主義の基督敎を信奉する、所謂文明國のお歴々が、互に矛を執り、罪なき幾百萬の生靈を戰場に曝したではないか。そして彼等は云ふ、『基督敎は平和を愛するけれども、正義の爲の戰ひを禁じはしない』と。戰爭といふと、この正義といふ言葉が出て來る。虫の好い言葉だ。一體どつちに正義があるのか、戰爭をする兩方の國が正義の爲に戰ふと云ふではないか。聯合軍側に利害關係を有つてるものは獨逸の非を數へ、正義の爲に人類の敵獨逸を懲らすのだと宣傳する。

獨逸側ではどうか、カイゼルは、神は英國を罰し給はむと叫び、神は正しき獨逸を守り給はむと云つてゐたではないか。世界的學者であるオイケンやハーナックまでも、祖國を辯護して戰爭に贊成したではないか。正義が何れにあるか分つ

たものではない。

戰爭の爲の教義變改

その正義がどつちにあるかゐんから、戰爭によつて黑白を決するのだと、或る論者は云ふ。そして、基督も決して絕對非戰論者ではなかつた。と云つて、急に基督教の教義を變改する。基督も『神の爲に戰ひつゝありと自ら信ずる者は、人命を傷けても差支ない』と云つたとか、『我が來れるは地に平和を致さむが爲にあらず、刃を出さむが爲めなり』と云つたとか、『我に從ふものは、わが爲に親にそむき子にそむき、夫にそむかむ』と云つたとか云ふ、基督の字句を聖書の中から拾つて來て、戰爭の守り言葉としたりする。

だが、それは字句によつて基督の根本精神をあやまつたものである。なるほど聖書の一ヶ所二ヶ所に、戰爭を肯定するやうな字句が無いでもない。それを文字通り解釋すべきではあるが、字句にのみ拘泥するならば、基督教ほど矛盾の宗教

はあるまい。「兩の右の頰を打つものがあるならば更に左の頰をも彼の打つ儘にまかせよ」といふ字句があるかと思へば「刃を出さむ」といふやうな字句もある。矛盾と云へば矛盾だ。が、さういふ例へ話的の訓話を通して、基督が說いた根本の大精神を見たならば、基督教は絕對的に戰爭を否認するものだといふことに異議のある筈がない。

ウイルソンはいふ

由來基督教は宇宙の神と人類との關係を家族的にたとへ、神を人類の父に相當すとし、我等人類はお互に同胞兄弟でなければならん而も君臣の關係のやうに立法的ではなく、親子兄弟の如く愛の關係に立つものとする。その主張の根本義の是非は暫く別問題とし、苟くも基督教が愛を基調とした世界同胞主義の上に立つものとすれば、どんな理由からしても、戰爭を是認する道理がない。

平和時代にはこの基督教を自分達の國教として誇つてゐた英獨佛米が、利害の

上からいよ〳〵戰爭となると、自家の矛盾撞着に苦しむ樣は憐れなものだ。米國が聯合軍に參加するとなるや、ブライアンは基督敎主義に基いて國務卿の椅子を去つた。そのときウキルソンは云うた。『ブライアンも自分も其目的は同一だ、彼は平和の爲には平和の手段を取れと云ふが、自分は今平和の爲に必要だから戰爭をせねばならぬと云ふのみだ。』と。

この言葉が當時の戰爭論者の唯一の寄り場所であつた。誰も好んで戰爭をしない。平和の爲に已むを得ないから最後の手段とするのみだ。雨降つて地固まる。どまかしの僞善的平和を裝うてゐるよりは、一刀兩斷的の態度に出て、鞏固な平和を齎らす爲に、男らしい態度に出るのが現代的だ、といふのが、その巧妙なる議論であつた。理窟はどうでもつくものだ。

一杯氣嫌で殺人

國家を一箇人と見るならば、戰爭は一種の懲戒處分で、つまり他の國が惡いか

ら之を死刑に處すと云つたやうなものだ。死刑が蠻刑であり、今日文明國の刑法が、この死刑を廢止する傾向にあるのは誰でも知ることだ。花井卓藏博士の如き、日本では死刑廢止論者の錚々たるものだが、『日本の刑法に死刑があるのが國辱だ』とまで云つてゐる。ひとりの人間の頭や胴を救はむが爲に手や足を切斷することがあるかもしらん、けれども、戰爭は決してさういふ意味で事實行はれてゐるものではない。『世の中には戰爭ほどの苦難が幾らでもある。だから戰爭が世界に苦難を齎らすからいけないと云ふことは出來ない。けれども、戰爭は殺人の罪惡を罪惡と思はず、却つて一つでも多くの首を取るものを勇者として譽め讃へ、氣のすゝまぬものを無理に一杯景氣に狂亂させる。人殺しの苦痛の感情を摩痺させる。無理强ひに之を行はせる。』と、トルストイが云ふ。

戰爭は平時の道德觀を逆にし、殺人の罪惡に勳功の虛名を冠らせる。平時の大罪が、戰爭となると逆轉して正義と化ける。こんな矛盾があり得ない。人道主義

の行者トルストイが、一方に徹底的非戰論者であつた所以も此處にある。

墨子の非戰論

支那に墨子といふ先覺がある。二千年の昔愛を基礎とする世界平和主義を力説し、自らその非戰論の宣傳實行のために、春秋の戰國を東奔西走して、諸方に割據する諸將の武裝解除を迫つた。或る日本人からこの墨子のことをトルストイが聞いて、熱心な墨子研究者になつたといふ有名な話がある。墨子については私は非常な興味を以て、此叢書の第一編に書いたから、こゝには詳しく云はない。

人間の最も矛盾した且つ一番損なことは戰爭だ。なぜか。墨子は云ふ、『人の畑へ入つて桃や梨を盗んでも、政府は之を罰し、人はその罪を罵る。他人を侵害したからだ。豚や鷄やを盗む者は、桃李を盗むよりもなほ惡いとされる。その侵害が大きいからだ。持兇器强盗に至つては最も罪が重い。然るに、それよりももつとひどい他國を侵略することになると、これを排斥しないばかりでなく、却つて

讃美する。人を多く殺したものは戰捷の頌德文を奉られる。譯の分らん話だ。』

更に云ふ、『侵略主義者は、何のかんのと名目をつけて、自分の無名の侵略を粉飾しようとする。そして、天に代つて之を討つとかいふ、天誅などといふ言葉を濫用する。』と。

墨子の博愛主義

彼はさういふ侵略主義者の非人道的な行爲を、あくまで痛罵し、こゝに世界的平和の國を建設するには、偉大なる愛と力の具現者、天の使ひとも云ふべき帝國が出現して、先づ社會に群がる社會主義者の群を絶滅し、愛の統治を實現するより外はないと云ふのである。彼の言ふところは孔子の仁の說などよりはもつときびゝしてゐる。

墨子のこの愛の哲學を兼愛說と名づける。名前なぞはどうでもよいが、とにかく、己れを愛すると同樣に他人を愛し、自分の親を愛すると同樣にひとの親を愛

し、自他の間に何等の區別をつけない事を兼愛と云つたものだ。その兼愛の反對は自他の別を設け、自己を愛して人を損ふのは別愛と云つた。一體墨子は社會學者で、社會政策の根本案として此兼愛說を唱へたものだ。儒敎の仁愛よりは、思ひきつて徹底してゐる。

彼の兼愛說は、自分と他人と其間の愛に親疎の別がない。といふので、『墨子の學は父母を無視するものだ』と孟子なども評してゐる。だが、孟子が云ふほどに墨子は沒我的の愛他を說くものではない。自分の父を無視して他人の父を愛するといふのでもない。ひとの父を愛してやれば、他人も亦自分の父を愛してくれるに違ひない。ひとの父を愛するのは、己れの父を愛する所以だといふ風な、利己的の愛他である。

墨子の世界同胞主義

墨子の愛の說はまた、古代哲學の特徵である。宇宙の大靈と云つたやうなものに對して密接な關係をつくり、基督の神に對し支那では天と云ひ、天は此世の凡てのものを同樣に愛してゐるといふ一義に初まつてゐる。天下にはいろ〳〵の國があるが、みな同じく天の國であるとし、人間には長幼貴賤いろ〳〵の別はあるが、すべてこれ天の子であるとする。天はすべての國を同等に見、すべての人間を同等に愛するといふのだから、神の愛の前に世界人類を同胞と見た基督敎の世界觀と彷彿する。

墨子は更に之を昔の聖人の言行や書物に考へ、支那の聖人と仰がるゝ堯、舜、禹、湯、文、武といふ人々は、いづれも萬民を同じやうな深さを以て愛してゐたと說く。ひとの親を愛するは己れの親を愛する所以だと利己的に說明する所は少し違ふが、彼の兼愛說は基督敎の博愛說に極めてよく似てゐる。

儒敎のいはゆる「仁」

墨子を語つたついでに、儒敎の所謂『仁』をかたづけるのが便利だ。儒學者は、

口を開けば『仁は孔子の學問の極致だ』といふ。孔子の道は、どんな場合にも唯一つの仁を以て貫いてゐる。

孔子以前にも、仁を說いた支那の敎へはいろ〳〵あるが餘り重く見てない。周禮にも知、聖、義、忠、和と仁とを並べて六德を說いてある。詩經にも『まことに美にして且つ仁なり』と云つて居る。仁は行ひの美名と解釋してゐる。日本語で云ふと、優しいと云つたほどの意味である。現にまた日本で使つてゐる仁といふ字は、情けがあるとか優しいとか云つたほどの意味であり、仁者などゝいふことを矢鱈に使ふが、孔子の仁はさういふ簡單なものではない。

孔子の最も御氣に入りの弟子の顏回を賞めて、孔子は、『三月仁に違はず』と云つてゐるが、之が孔子のゆるした最大の讃辭で、その他の弟子共や他の人々に對しては、『未だ仁を知らず』と、やつつけてゐる。仁といふものをどれだけ重大視したか想像出來る。

「仁」の解釋のいろ〳〵

ところがこの仁が、實に捉へ難き仁で、論語の中などにも盛に仁を說いてゐるが、處に依り相手によつて違ふので、どれが本物の仁だか見當がつきにくい。儒學者の間に古來種々の解釋があり、お互に仁を相手取つて議論したものだ。

廣い意味で、仁は仁義禮智信の四つを包括すると說き、義禮智信と相對立さしゞ狹く考へたのは間違つてるといふ風で、仁を以て道德一切を包括するものだと說く人があり、またずつと之を人生哲學的に解釋して、天地萬物の生成を仁とし、仁から宇宙が生れて來た、神の愛の象徵として此世界が創造されたと說く基敎の考へ方のやうに、此世を仁の現はれと觀、杏仁とか亞麻仁とか云つて、果物の種子を仁といふのも、つまり仁が凡てのものゝ發端だからだといふ附會を云ふ人もある。

朱子は『仁は心の德、愛の理』と云つてゐる。心の德は分りがいゝが、愛の理

はちよつと變だ。一體宋の學者は、程子でも朱子でも、理氣といふ說を立てゝ、物には理と氣がある。理は土臺で氣は現象だと說く。今の哲學で云へば現象と實在に當る。理氣の說は支那の近代哲學ではやかましく云はれたものだが、孔子は未だ嘗て理氣を說いたことがない。それを孔子の仁に當てはめるのはどうかと云はれる。古い註釋では、仁は善行の大名と云つてゐる。日本でも、折衷學派の太田錦城の如き此說を採つてゐる。物徂徠は政治的に解釋して、安民長人の德などと統治者としての德を說いてゐる。伊藤仁齋の說に到つて最もよく仁を語る。『仁は慈愛の德、遠近舊外、充實通徹至らざるなきを仁といふ。』といふので、今の博愛といふ意味に近よつてゐる。門人が孔子に尋ねたとき、孔子は簡單に、人を愛すと云つた。

孔子の愛と基督の愛

要するにいろ〳〵な解釋をするが、仁といふ言葉の代りに愛といふ字を代理さ

欠

五　現代の「愛」の哲人

――タゴールとロマン・ロオラン――

新生命を吹込まれた印度哲學

愛の哲學を高唱して、最近世界の思想界を震撼さしたのは、印度の哲人タゴールである。彼に依て新東方主義の呼聲が、始めて世界思想界の中心に入つて來た。現代の思想界は、十九世紀の物質的な傾向から精神的な傾向へと移つて來たことは前にも云うた。東洋の文明が西洋の文明に比べて精神的な匂ひの高いことも、改めて茲に云ふ暇がない。

タゴールの哲學は、此叢書の第四編でも紹介したやうに、東洋古來の聖賢に與つて蓄積された精神的文明に、近代的な要素を加味した思想である。彼の主著『生の實現』に示された彼の思想には、別に驚くべきほどの創見といふべきものもない。印度古來の聖典として、佛教哲學の原泉と云はるゝ、ウパニシャットの思想

欠

を祖述したに他ならないが、然し彼によつて今まで厭世哲學視されてゐた印度の思想が、進化論的な新解釋を與へられ、生々しい活動の福音を其中に吹込んだところに、新東方主義の『新』といふ字の意味がある。

大自然との親和

印度哲學の根本思想は、宇宙自然と人間との調和にある。自然を征服したり支配したりすることではなく、自然の懷の中に入り、そこに合一と親和の新しき生活を實現するのが人生の目的だといふので、他のものを征服し所有することでなく、「他のものゝ中に自分を實現することだ。」古來の印度の先覺が望んで來たところもそこにある。

つまり、人間の靈と世界の靈即ち個體と宇宙の間には調和がある。その調和を離れて、人間が人間として孤立すれば、人間は滅びる。孤立といふことが、此世の中の最も怖るべきことで、すべてのものは親和し調和して行かねばならぬ。城

壁の中に立籠つて、己れひとりの生を守らうとしても、それは爭ひを導くのみである。もつと解放的に、城廓を出て大自然の中に生の歡喜を求めねばならない。つまり、全宇宙の個々のものが、お互ひに敵對的に孤立せずして、合一調和して行くところに、幸福な世界の實現が望み得られるといふので、個人の生命を大宇宙の生命の一分子と觀るといふやうな點では、ベルグソンやロマン・ロオランの思想と相通じたものがある。

宇宙の大靈と小さい我

そこで、その宇宙の大靈といふのはどういふものかといふと、此全宇宙をはぐくみ育てる一種の精神で、基督の神のやうに、宇宙の外にあるのではなく、また佛教の佛のやうに極樂の彼方に鎮座するものでもない。此世の萬有の中に滿ち充ちてゐる一の大きな流れだ。ウパニシャットに云ふ所謂ブラマ(梵)の思想がそれで、自分といふこの一個の人間もその大きな靈の一つの現はれに過ぎない。た

だ、その大靈を小さい我の中に閉ぢこめて、萬有に相通ずるものから孤立さして
ゐるのだ。その閉ぢこめられた魂を救ひ出して、宇宙の無限の靈の中へ溶けこま
すことに依て、初めて我も人も相親和して幸福な世界へと進化して行ける。その
小さい自我の囚はれから、どうして宇宙の靈の一分子である靈を救ひ出すことが
出來るか。それは先づその靈の愛であるといふことを知ることだ。とタゴールは
言ふ。

愛による神人合一

つまり、此世は愛によつて造られた。ウパニシャットに云ふ所の『喜びよりす
べての物は造られ、喜びによつて彼等は支へられ、喜びの方へ彼等は進み、喜び
の中へ彼等は入る』といふ喜びは、愛のことだ。此世は神の喜び卽ち愛から生れ
たものだ。一本の木も一塊の石ころも、そして動物も人間も、みなその愛の分離
であり、形を異にする愛の分家のやうなものだ。われ〳〵の自我も、要するにそ

の愛の神の自我の分れである。だから、われ〳〵が宇宙の大靈と融合し、そこに
歡喜と幸福の世界を造るためには、その愛の精神を發揮することによつてのみな
され得る。自然の中に溶け込むと云ひ、宇宙の大靈と親和合一するといふのも、
たゞ愛によつてのみ成し得ることで、われ〳〵の自我は正しく發揮すれば、愛そ
のものゝ精神と一致するやうになる。神人合一の世界がそこに來る。といふので、
かなり神秘的な宇宙觀であり、たゞこれだけを云うたのでは、彼の哲學の根本基
調を示すに過ぎないが、彼の哲學が愛の一字で被はれ、そして彼は『愛の哲學者』
と云はれ、『愛の詩人』と云はるゝ所以が此處にあるといふことを說明し得るに止
まる。

犧牲を笑ふロオラン

ロマン・ロオランの愛の哲學は、現代の力强い個人主義の上に立つてゐる。彼
は飽く迄も積極的だ。この世を一箇の場戰と見、意地の惡い運命と戰ひ、殘虐な

苦しみの中に忍びつゝ、それに打克つて進むのが人生だとし、忍苦の德を讃美するやうな點では、彼の思想は基敎的だが、然し彼は決して犧牲の德を說かない。

『犧牲の話ぐらゐ馬鹿げたことはない。あれは心の貧弱な坊主共のすることだ。若しも犧牲が喜びでなく悲しみであるならば、やめるが好い。お前はそれに適さないのだ。』といふ。彼の愛は自我を犧牲としての愛でなく、自己を擴充しての愛だ。』そこに個人主義と愛他主義との握手を見る。

英雄主義の勇者の踏む道

出來るだけ苦しいことから逃げ、ボーッとして夢のやうな空想の世界に住んでゐる『安價な樂天主義者』もあり、いたづらに人生を悲觀し、それから逃げて苦痛を回避しようとする『惰け者の厭世主義者』もある。正面から人生に打克つて行くことの出來ない卑怯者だ。その卑怯を罵つたのが、ロマン・ロオランの英雄主義である。『世の中にたゝ一つの勇氣がある、それは、有るが儘に人生を觀、正

面から人生にぶつかつて、そしてこれを愛することだ。』『そして之を愛する』といふ積極的な態度は、ロマン・ロオランの思想の最も特色ある點だ。

彼は何事を措いても眞實を求めた。ゴマかしや虛僞を憎み、ごまかして幸福を盜むよりも、不幸であつても構はんから眞理に生きよと叫んだ。

眞正面から見たら、人生は苦しいかもしらん、けれどもその苦しみに怖れて、眞理を覆うてはいかん。といふ彼の徹底的態度は、彼をどこまで苦しましたか分らん。

人生の事を一つもごまかしもなく、また小しも目を覆ふことなく、現世にあるが儘に見て行くことは、非常に勇氣であり苦しみである。釋迦もこの苦しみを味はい、トルストイも之に惱んだ。そして、彼等に最後の光明を與へたものは、その苦しき人生の中に一脈の愛の光りが流れて居ることを發見したときだ。ロマン・ロオランは眞理を求めた。そして眞理の底に愛を見た。眞理は理解から生れ、理

解は愛から生れると考へた。

愛によつて滲透された眞實

彼の言ふ眞理とか眞實とかいふのは、彼の言葉で云へば、『愛によつて滲透された眞實』で、科學者やまた或種の哲學者の云ふやうな、冷たい空疎な理窟や觀念でない。直ちに實行に移さるべき眞實であり、自分を否他人を世界を幸福ならしむべき眞實である。愛に依て滲透されたる、そして『直ちに實行に移さるべき』といふところに、彼の眞實は條件づけられてゐる。だから彼は言ふ、『自分自身よりも、むしろ眞理を愛さねばならぬ。併し眞理よりもむしろ他人の幸福を愛さなければならない。』と。

無限のたうとさ

また、『われ〳〵は最も高尚な眞理のうちから世間の幸福を增進することの出來るものだけを漂白すべきだ、その他の眞理は、それをわれ〳〵の心のうちに包んで置くがよい。』と云つてゐる。

冷い解剖にのみ耽つてゐた自然主義時代の思想から見ると、ひとの幸福を增進することの出來る眞理でなければ、人に云ふべきものでない、といふ彼の新理想主義の思想は、暗黑な世紀末の行き詰つた思想界に、光明と希望とを投げて、所謂彼の英雄主義も、愛を基調とするところに、無限のゆかしみと尊さとを見る。

六　戀愛の歴史をたづねて

――戀愛發達の歴史的觀察――

卑められたる戀愛

愛を宇宙の本元と見たり、又至高至上の道德としたりして、人間生活の中樞とする思想は、希臘羅馬の昔からあり、この流風餘韻が長く後代に傳はつて、多くの哲人の好題目となつて來たことは、前章までにその一班を窺つた。けれども、狹い意味の戀に關する問題については、最初の『はしがき』で云ふ如く、その研究が極く新しいと云つてよい。尤も、十八世紀の頃から、西洋にはこの戀愛を取扱つた眞面目な本が、かなり出てゐるが、日本などではホンの最近のことで、西班牙カゼよりも遲くはやつて來たと云つてよい。かと思ふと、『女ならでは夜の明けぬ何とか』云うて、なかなか隅に置けない國民ではある。一方に擯斥し輕蔑しながら、他面にはかなり亂れた性的生活が續いて來てゐる。武士道といふやうな舊

道德には、戀愛といふものに對する理解が全然無いと云つてよい。兩性關係を單に功利的に子孫繁榮の一手段と考へたり、性慾のいたづらと見たりする、極めて固陋な單純なものであつた。

戀愛觀の書換へ

今日どうして戀愛問題が東西に喧しいかと云ふに、その發端を顧みると、近代文明の凡ゆるものゝ出發點である佛蘭西革命時代に溯らねばならなくなる。男性に依て所有物視されてゐた婦人の自覺から、例の婦人解放の問題となり、一方には女權擴張問題と相俟つて、とにかく婦人が威張り出して來たことに起因する。それと、も一つは、科學の發達から進化論的に男女關係の發達を觀るといふやうな眞面目な研究も起り、今日では、いやしめられてゐた戀愛が、人生の中でも最も尊きものとして觀る人もある。戀愛に關する道德が、全く書換へられたかの感がある。そしてその最も代表的な人としてはエレン・ケイがある。その說は、性

的道德の革命を齎らしたものと云はれる。

文化の發達と共に、兩性關係もいろ〳〵の變遷を經て今日に及んでゐる。少くも兩性關係に對する考へが、時代と共にいろ〳〵に變つて來てゐる。その戀愛に關する思想の發達を三階段に分けて說いたエミール・ルッカーといふ人がある。つひ數年前に公にされたものだが、その名著『戀の三階段』は、世界の學界と文壇の注目を惹いたものだ。戀愛觀の變遷を物語るのに、頗る都合よく出來てゐるが、その話をする前に、戀の本體を覗いて見る。

戀愛又キの性的交渉

動物の世界を觀ると、戀愛なしに直ぐ性慾衝動に及ぶ。戀愛などゝ云ふマドろつこしい事をしてゐずに、最後の目的をわけもなく實行する。そして種族の保存繁殖がその間に自然に行はれる。人間樣の世界ではさうは行かない。米國のモルガンといふ學者、此人は『歴史以前の研究』に沒頭した人だが、其話に依ると人間

の一番最初の所謂性交無制限時代は、誰がどの男のもので、誰がどの女のものだと云ふ區別が無かつた。少し進むと、何人かの兄弟が共通に一人の細君を有つてゐたり、何人かの姉妹が共通に一人の夫を有てゐたりした時代になる。極めて自由な多夫多妻制が行はれてゐた。そんな話をすると、道學者連が火の如く怒つて反對したものだ。所が、モルガン等の考へ方では、寧ろそれは人間の恥でも何でもない。嫉妬の情の無かつた事が、他の動物と違つた所以で、獨り人間の誇りとした所であらうとやり返す。

モルガンは、此無制限時代からだん〳〵發達して來た次第を、半血族結婚の時代から次に『氏の制度』が生れ、だん〳〵進んで略奪結婚、賣買結婚と云ふ風になり、一夫一婦の制はずつと後のことゝする。

戀の發端

外部の生活からいろ〳〵と周圍の事情も起つたり、自分の心も亦贅澤になつて

あれで好い悪いと云ふやうな考へも起り、大昔のやうに無雑作に性慾を遂げるわけには行かなくなつて來た。そこでいろ〳〵のさうした障碍を切り拔けなければなか〳〵成功が出來なくなつて來た。『この垣一重が鐵の』で、垣一重が金城鐵壁となつて、その目的を邪魔する時代となつて來た。そこで、垣を乘り越える努力が要る。苦心もせねばならぬ。この努力苦心は、人の心に一種の緊張を與へる。その緊張した心持、男が女を得ようとする熱心、女が男に近寄らうとする心の緊張つまり、そこに異性間でなければ有り得ない熱望眷戀の情が起る。此熱望眷戀の情が戀愛だと云ふことになる。も一度繰返せば、いろ〳〵の事情から碍けられた性慾衝動が、その目的を達するために起る熱望眷戀が戀だと云ふことになる。だからして戀は昔から有つた。何も近代人の特權でもなければ、ギリシヤ人の誇りでもない。

戀愛が複雜になつて來た

性慾の相手たる異性が手に入りさへすれば、それでよい、それがどんな異性でもかまはぬ、性交さへ遂げられゝば好いとすれば、その戀愛は極めて簡單容易なもので、從て周圍の都合さへ好ければわけもなく達せられる。原始人の戀愛はそれであつた。金で買へる遊女に對する一夜の戀も、或る場合にはその程度を出ない。けれどもそれが少し進んで、その女を全く自分のものにしよう。他の男に觸れさせまいとし、又女の方からもその男を全く自分だけが占領して、他の女に愛情は分けさせまいとする時になつて、その爲に努力と苦心が要るやうになる。

一體、戀と愛とは、また他の方面から考へて見ても異常な違ひが出て來る。戀は、愛する同志以外の人を眼中に置かない。否むしろ置くまいとする。戀人を得た娘は母親の愛をさへ捨てようとする。『私はあなたが好きです』と云ふ言葉の裏には、外の人が嫌ひですといふ意味が含まれてゐる。戀はさう云ふ意味で極めて狹い。そこに他人を容れ得ない。愛はそんな分量的のものでない。一時に千人の

人を愛しても、その爲に愛の分量が減つたり薄くなつたりするものではない。戀は千人に一時に及ぶことが出來ぬ。そこには徹底した占有慾が加はつて來る。

文化の發達と共に、人間の性慾衝動も複雜になつて來、單に性慾さへ遂げらるればそれで好いと云ふ風には行かなくなつて來た。道德的にも考へねばならず、世間の思惑もあり、美醜の問題も加はり、人格とか趣味とか云ふやうな條件もあり、それに經濟問題までも含んで來て、そんな風に簡單に性慾の相手を求めると云ふこと丈ではなくなつて來た。戀愛が進化して複雜になつて來た所以もそれだが、然し要するに性の問題を離れて戀愛など云ふものが、文明人の一種の精神的遊戯かの如く有り得る筈がないと云ふことも、戀愛の進化の跡を尋ねれば自ら解る。

ギリシヤ羅馬時代の戀

ギリシヤ羅馬の時代から基督敎の時代になつて來ると、戀に一種に神話じみた解釋をつけるやうになり、一人の男女が二人に分裂して、その二人となつた男女

が他の一人を求めるのが戀愛だなどゝ云ふ、夢の樣な思想が行はれて來た。「男女が再び一體となつた時に神の國は來る」などゝ基督も云つてゐる。つまり此の世の中には、神に依て或る特定された一人の男と一人の女とがある。その二人が結び付かうとするのが、戀愛だといふ風に見るのだが、今から見れば詩人的空想に過ぎぬ。けれども異性でありさへすれば、何でも好いとした程度の原始時代を一歩拔けてゐることは明かだ。

エミール・ルッカの三階段の話をする積りで、つひだん〳〵話が古い時代に行つたり戻つたりしたが、ルッカのその第一階段と云ふのは今云ふギリシヤ、ローマの時代から、基督敎最初の一千年間近くの間のことで、前にも云ふやうに此時代になると、一段進んでいろ〳〵空想も加はり、戀の內容が多少豐富になつて來てはゐるけれども、未だ大多數者は、單に肉慾を中心とした時代で、獸慾的肉的以外には考へを進めず、女も亦男子の肉慾を滿足せしめる道具となつて、些かも不

滿を懷かずに滿足してゐた時代であるのみならず、女そのものは一種の罪業の塊か何かのやうに思はれてゐた。

女を崇め奉つた時代

その反動で、今度は一躍して女を神樣の如く崇め奉るやうな時代が來た。同時に戀愛が非常に神聖化されて、男が女に對する感情なども、從來のやうに肉的なものは極端に卑められ、婦人は人間性を超越したものゝやうに扱はれ、精神的戀愛の對象となり、所謂肉を離れた清い戀と云ふものが一世を風靡した。聖母マリヤ崇拜熱の起つたのも此時代で、恰度十二世紀から十九世紀の前半に至る、中世紀時代全部に此思想が行はれた。

然し之を今から考へると、餘程空想の勝つた考へ方で、無論その當時にも表面にはさう云う思想を謳歌して居乍らも、もと〳〵戀愛と云ふものが、根强い性慾衝動に根ざしてゐるものだから、なか〳〵そんな空想で性的戀愛を撲滅して了ふ

わけには行かなかつた。却つて、ます〳〵ヒドい肉慾的の耽溺生活が竊かに隱れて行はれた。併もそれが一寸世間に知れると、道德上の一大惡事かの如く取沙汰せられ、神樣であるべき筈の婦人は、反動的に『惡魔の手先よ、地獄の鬼よ』と、凡ゆる讒謗を受け迫害を被つた。

「清い生活」の矛盾

さう云ふ不自然な精神的戀愛の所謂清き生活の裏には、絶えず肉の悶えがあつた。肉が惡いと云はれつゝ肉を離れることの出來ぬ矛盾が近代人の堪へ得ぬ悶えの種となつた。靈と肉と二つ別々に分けて、その間に彷徨する苦しみが愚に似て來た。斯してルッカの所謂第三の時代、性慾衝動と精神的戀愛とが統合された靈肉一致の戀愛時代が來、婦人は初めて一箇の人格を有する人間として見做される時代が來た。これが十九世紀の後半から現在に到る迄の間で、近代から現代に及ぶの第三の時代である。

女も一個の人間として

畢竟性慾の問題に打つかつて、今迄のやうな、馬鹿に精神的に祭り上げて了つた戀愛に對する、その反動として第一に肉慾的耽溺戀愛が盛に行はれるやうになつたのだが、けれども未だ耽溺生活が惡事でないと云ふことを、堂々と肯定する勇氣が無かつたのだ。それを近代になつて、精神的戀愛も認めるが、同時に肉的戀愛も卑しむべきものでないと云ふ思想が起つて來た。『婦人を男子の性慾を滿足させる單なる道具』とした古代、『婦人を神樣の如く尊敬し奉つた』中世、その何れも妥當でない。矢張人間としての人格を婦人にも認めてやるべきで、道具と神樣とを打つて一丸とした一箇の人間とすべきだと云ふ思想、之が個人主義の發達と共に、兩性關係の上に男女對等の人間性個人性を認めねばならぬと云ふ處まで進んだ。

欠

戀愛中心主義の新道徳

近代の戀愛觀は、かういふ風に戀愛の高尚複雜な所以を說く。エレン・ケイは、さういふ意味の戀愛を以て直ちに結婚の條件としたのである。結婚にこの戀愛がなければ、たとへ法律上や表面上は整つてゐても、それは斷じて不道德な結婚だとする。そして、反對に、何等法律上の手續や社會的の條件が整はずとも、戀愛を中心とする男女の共同生活は、立派な道德的結婚だといふ。

正式に結婚したとしないとによらず、父として母として無責任なことは常に罪惡だ。互に責任をしつかと持つことによつて、たとへ不正式の結婚でも神聖化されるとケイは云ふ。子供の事などに對しても、たとへそれが法律上の私生兒でも、父母が哺育の責任を全うするならば立派に道德的だといふのである。現在の結婚生活の多くは、戀愛以外のいろ〳〵の外的動機から出來てゐる。金のためとか世間的野心の爲めとか、一時の肉慾のためとか、何れ男女の一方がいや〳〵ながら

欠人

自己を犠牲にすることによつて成立してゐる共同生活だ。之を女の方から云ふと娘は両親の選んだ男を幸福ならしめるために、娘自身の選んだ男を不幸ならしめてゐるのだ。これではいけない、といふ風に、彼の戀愛に關する道德觀はあくまで徹底してゐる。

新道德と現代の撞着

それなら、親を捨てゝも構はんかといふ問題が起るが之は困る。現に親孝行の爲に戀愛を犠牲に供さねばならん場合が起る。またさうすることが義務でもあり、多くはその通り實行してゐる。

それは恰度戰爭が始まると、われ〳〵も國民の義務として隣國人を殺す爲に戰場へ行かねばならんと同じ理由だ。人間としては避けたいことだが、いまの世界では避けるわけには行かん。親孝行の爲に戀愛を犠牲にせねばならぬ破目に陷つた人は、恰度之の場合と同じだ。それは、ひとり戀愛のみに關したことでない。

今日の社會は、われ〳〵の不本意なことを、强ひて行はしめるやうな事はザラにある。それは現代の社會にいろ〳〵の缺陷があるからで、さういふ現狀だからと云うて、その先へ出ようとする改造の精神を踏みつぶして置くなら問題はない。

自由離婚說

この邊から、ケイの所謂新道德が次第に鮮かな色彩をつけて來る。夫婦間に戀愛のないことを發見した場合はどうするか、初めから無かつた場合は云ふに及ばず、戀愛は一種の感情だから變化せぬとは限らぬ。初めは全心を打込んだ戀愛關係から出來た夫婦でも、後でそれが消え失せたらどうするか。『ひとは長命を約束することが出來ぬ如く、戀愛の永久不變を約束することも出來ない。人の約束し得ることは、その生命その戀愛に最善の注意を拂ふといふことだけに過ぎない。』それなら變つた場合にどうするか。ケイは之に對して、その結婚は破壞するのが當然で、繼續するのは寧ろ不自然だと斷案を下す。之が有名な彼女の『自由

「離婚論」である。

自由離婚說に對する反對

エレン・ケイの自由離婚論は一夫一婦の嚴守といふことを結婚制度としてゐる歐米にあつては、隨分大膽な思ひ切つた主張であつた。いろ〳〵の方面から猛烈な非難攻擊を受けた。その中でも、獨逸のフエルスター敎授の攻擊が最も猛烈を極めた。

フエルスター氏の『性道德と性敎育』といふ著書の如き、エレン・ケイの自由離婚論の反駁を以て全卷をおふてゐる。元來基敎は最も嚴正に一夫一婦の信條を保ち、神に依て結ばれたる夫婦である以上、殆ど絕對に離婚といふものを許さない。その思想が長く歐米人の頭にしみ込んでゐる。フエルスター氏の議論も、徹頭徹尾此一夫一婦の主義を墨守しての主張だ。

『ケイは形式を輕視するが、形式にも非常に好い處がある』と先づフエルスター

が云ふ、確定した形式の下に行はれた結婚は、人の行爲の自由を奪ひ、ともすれば得手勝手になりたがるものを制御する。それに、性的方面のことは、一時的の衝動は情念に驅られ易い。そして、やゝもすると他人の生活にヒドい影響を與へるやうなことも起る。だから、かういふ方面の事は、その行爲の影響の及ぶところが、如何に深刻であり如何に廣いかを考へねばならない。神聖化された永久的の形式は、決して外面的の脅迫ではない。自己の品性を高めるために、それを外面的に表現したものである。結婚といふ民法上の形式は、一面はその人々の生活の永久性を暗示し、一面は外に對する責任を警戒するものだ、といふ風に說き、結婚の外的形式の價値をいろ〳〵に力說してゐる。

そしてエレン・ケイの自由離婚の問題に一矢を酬うべく、われ等の心は極めて變り易いものだから、その動搖不定と氣隨氣儘に對して、常に社會が監督せねばならぬ、と云つたオーギスト・コムトの言葉を引き、結婚を容易ならしめれば、そ

の結果はます〳〵一時の氣分と我儘とを發揮させることになる。深い動機から起る離婚は、時に或は幸福になることがあるかもしれない。けれどもそれは特殊の場合で、全問題を決する最後の標準とはならない。容易く離婚が出來るといふと常に不安と動搖とが夫婦間の心の裡に潜み、引いてその全生活をも不幸に陷れることは、心理學に徵して疑ひない眞理だと說き、彼自身自ら自分の主張を『舊道德』と名づけ、現代はこの舊道德によらねばならぬと力說してゐる。

この人は戀愛を全然認めないといふのではない。が、その考へ方が違ふ。古來基督敎の感化から來た無我の戀と云つたやうなことが、戀愛生活を神聖にし豐にし、それによつて始めて感覺的な領域から脫けて高尙な精神的な戀愛になる。ダンテやペトラルカの戀愛は、畢敎徒の戀愛に比して價値の高いのはそれだ。つまり、基敎的愛に育まれた戀愛には、一夫一婦制を徹底的に墨守する必要がある。その爲には强烈な克己力と禁慾主義が必要だ。といふ風に見るので、彼の言葉で

云へば『兩性間に於ける衝動と情念との世界は、一夫一婦といふ確定的形式に依て、意志的に征服させる。』ことである。

エレン・ケイの遮斷

フエルスターの所謂『舊道德』にも、無論一理はある。けれどもエレン・ケイに對する非難としては多少見當違ひの觀もある。ケイは高尙な戀愛所謂自由戀愛を云うてるのではない。『戀愛の最高典型は、道德的にも智識的にも、同じ並行線の上に居る男女の間にのみ有り得るので、さういふ男女が、お互に自己を完成する爲に互に愛し合ふ狀態である。』と云ひ、決してフエルスター氏の考へてるやうなものではない。ケイは極めて文學的な比喩を用ひてかういふ風にも云つてゐる。『死の來つて之を遮ぎらぬ限り、お互の生活をばゴシック式の大寺院の建築のやうに、壁の上に壁を重ね、裝飾の上に裝飾を重ね、遂にその尖端の頂の渡金が、入陽の最後の光を捉へるまで築きあげて行く。』といふ風に、戀愛の理想的方面を

最高の高さまで持上げてゐる。そしてそれは當然一夫一婦といふことにもなる。

フエルスター氏の非難は、放縱我儘な自由戀愛に對する警告として傾聽すべきだが、それ以上の何物もない。エレン・ケイは答へて云ふ。

『自由離婚はどんな弊害を含まうとも、野卑な性的習慣や恥づべき賣買的性交や、傷ましき心靈虐殺や其他結婚によつて嘗て釀され又現に釀されつゝある弊害よりも、甚しき弊害を含んでるとは云へない。』

と、そして正しき妻以外に情婦を持ち妾を持つ現代の一夫一婦制の裏に潜んでゐる醜怪事をどうするかといふ。

次に、子供のある場合はどうかといふ問題が起るが、それはもつと複雜だ。けれども、エレン・ケイは之についても明快に自由離婚を主張してゐる。子供の教育の爲めにも離婚した方が結局よいといふのである。

因に自由離婚といふ言葉がひよつとすると誤解を招く。之は離婚をすること非常に困難な法律によ

つて縛られてゐる歐米人が、その法律的束縛に對する意味も含んでると思はればならぬ。日本と比べると、離婚の統計上の數字は、向ふはずつと少い。それは實際に少いのではなく、法律上の離婚の手續が非常にやかましいために、事實は別居し離婚してゐても、法律的には夫婦になつてゐるといふのが多い、といふ事實も考へればならぬ。法律上の妻といふやうな言葉が、向ふの文學によく出て來るのもかういふ背景からだ。

戀愛の新道德を主張する人はエレン・ケイばかりではない。英國のバアナアド・ショオやエドワード・カアペンター、米國のギルマン夫人、オリーヴ・シユライミールなどを始めとし、獨逸の故ベイベルやバックスのやうな、社會主義の根據に立つてる人もある。その最も代表的と見られるのがエレン・ケイである。日本にもその著書が飜譯されてゐる。

バーナード・ショオの離婚再婚論

結婚の儀式なども無用なものだ。と、皮肉に出るのがバアナアド・ショオで、

結婚の儀式が男女相互の永久の誓約だなどゝ思つてゐるのは甚だバカげてゐる。彼一流の皮肉な調子で、『指環やヴェールや誓約やを種にして、男の愛情亦は女の愛情を、二十年は愚か二十分間も固定させ得るやうな手品があるものでない。』と云つてゐる。

ショオは、離婚や再婚に反對する一般人の意見を愚とするばかりでなく、更に積極的に、離婚と再婚とを推賞してゐる。法律上でも離婚を一層自由ならしめよといふのである。そして、從來の離婚の唯一の理由は姦通にあるとしてゐるのは間違つてゐる、更に重大な理由があると云ひ、夫が妻を苦しめる場合、妻が夫に逆ふ場合、すべてが離婚の理由になる、姦通の如きは、ずつと下の方に置くべき理由だといふ。

ショオはまた、結婚を欲しない男女に結婚を強ひることは一種の奴隷制度だと痛論してゐる。『けれどもそれは結婚を斷念してゐる人々に、結婚の繼續を強ゐる

ことほど惡くはない。配合者同志の意見が一致しないといふことは有り得る。即ち甲は結婚の繼續を欲してゐるのに乙は解除を欲してゐるといふ場合がある。けれども、さういふことは、何も夫婦の間に限つたことでない、女に結婚を申込んで拒絶された場合何時でも起ることだ。その女を愛してる男にとつて、それは非常な苦痛だ。で、自殺をするとか脅かしたり、また時としては實際自殺することさへある。けれども、その男の立場は、恰度妻にわかれて妻から離婚解除を望まれてる男と同じだ。若し諸君が迷信家だとすれば、それは同じでない結婚は別問題だといふであらう。それは諸君が間違つてゐる。結婚の中には何の魔法もない筈だ。假りにあるとすれば、結婚した夫婦が別れたがる筈がない。然し彼等は分れたがるのである。そして彼等が別れたがるのに、別れさせまいと強ひるのは奴隷制度に外ならぬ。』

と云ひ、更に次のやうな結論を下してゐる。

「千の結婚は千の結婚を意味する、たゞそれつきりである。此の結婚は二千の結婚を意味し得る。何故といふに、その夫婦は皆再婚し得るから、離婚は夫婦を一度とりかへさせるものだ。相手のない場合は、殊に非常にいゝわけのものだ。」

と、ショオ一流の警句の中に、實際味はうべき何物かゝ含まれてゐる。

カアペンターの結婚論

カアペンターは現代の自由思想家の隨一であるだけに、此問題に對して極めて自由な意見を持つてゐる。

「結婚にして若し何等の束縛なく、全く自由任意の關係となり、事業經營のことでも趣味利害のことでも、夫婦が互ひに勝手にやつてゐるやうになるならば、却つてそれだけその愛も深くなるだらう。時には遠く離れて自由に遊びに行くもよい。その規模が大きくなるだけ、その關係も意味が深くなるだらう。」

と云ひ、從來の一婦一夫制が餘り褊狹固陋であつた爲に、却つて深くなるべき

戀愛感情を消し殺して來たといふ。

つまり、戀愛の自由の主張で、エレン・ケイが結婚生活の理想的狀態と云つてゐる『男女二人をそれ〴〵お互ひから獨立させつゝ而も二人が二者一體となるといふ完全に向つて發展する。』生活が、カアペンターの云ふ自由である。

更に離婚問題については、今日のやうに、一度結婚すれば、是非それを生涯繼續するといふ風は、もう長く行はるべきことでない。ひとが男女關係の神聖を尊ぶことを知れば知るほど、無經驗時代の約束の爲に、生涯を縛られるやうなことは好まぬ筈だ。生涯つれ添ふといふことは、さして重大視されなくなるだらう。と云つてゐる。

結婚と道德との問題は、日本人に取つて實に冷水三斗の問題だ。戀愛を基礎としない結婚が罪惡だ不道德だと云つた上でそこら中の夫婦、これから出來上らう

とする夫婦、殆ど悉く罪惡であり不道德であることになるだらう。けれども、離婚問題は、それほど重大には日本人には響かない、といふのは、西洋ほど離婚を日本人は不道德視せず又法律もそれほどやかましくないからである。

思想叢書 戀と愛との哲學（終り）

戀と愛の哲學
定價金六拾錢
大正十二年八月廿日印刷
大正十二年八月卅日發行
著者　加藤美會
東京市神田區通新石町九番地
發行者　大柴四郎
東京市神田區三河町一丁目十六番地
印刷者　川上隆
東京市神田區三河町一丁目十六番地
印刷所　四版工業株式會社
發行所　東京市神田區通新石町
電話神田三三振替東京二四三　朝香屋書店

加藤美命著◆ゼントルマン叢書

(1) アインスタイン 相對性も是なら分る

三十八版

分らぬ物とあきらめた相對性が復活しました

定價四十錢
送料金四錢

どの本を見ても失望した人の爲に、分らぬと聞き怖して敬遠してゐる人の爲に薦む。世界を震撼したアインスタインの原を、小學程度の教養の人にも分るやう書き卒いた著者の技倆の冴えを見よ、第一頁から笑ひながら讀める國民讀本として發兌匆々大評判です。

内容の概觀

▲一尺差が九寸になつたか▲學者の力瘤の入れ所（科學の茅生からニュートン迄）▲光學の爭ひ▲アインスタインの役目▲時計も物差も當にならぬ▲こゝが相對性原理の要所▲今までの學說がぐらついた▲相對性を一言で云へば（外數十項）

(2) 社交知識 吾身の上の恥と損

二十七版

つまらぬ事で恥かくなくらぬ事でだかくなる

定價四十錢
送料金四錢

時には龐相も一興だが、ザツクバランで通る仲にも腹の底には用意がいる、希くば本書一卷は文化の物差云はず語らず本書一卷は文化の物差云はず語らず社交の骨の眞を穿つ他人を笑ふ前に先づ自己を省察されよ、紳士教養のメーターは之

内容の概觀

▲お客樣の御入來（客の迎接と社交機微）▲人を訪れてボロを見せ（訪問の心得と上手下手）▲箸をとるにも氣がひけて（今の人にも必要な和洋食卓の禮法）▲座敷はあるが智慧がない（客間の裝飾心得）▲盲に鏡を贈るが如し（挨拶見舞贈答）

加藤美命著◆ゼントルマン叢書

(3) 刑法知識 罪なき人も油斷すな

二十版

（奇拔な附錄）當世閻魔番附

犯罪處罰一目瞭然

定價四十錢
送料金四錢

遠くて近いは男女の仲、善と惡とは紙一重といふ、過失が過失で通らぬが今日の法、又此方が眞直でも先方から曲つて來れば正當防衛の策も要る。法は惡人の爲めに存せず、善人の爲に存す知るは一時、知られば一生の損無精をせず御一讀、一生安心の資とされよ。

内容の概觀

▲有難くもあり迷惑でもある（刑法の御利益）▲吾等の生命と生活の爲に（全人格の保護の法律）▲金が敵の世の中（財產に關する罪）▲お互に社會の一員として（公安を害する罪）▲國を亂す罪▲お慰さんの一寸來い（外數十項）

(4) 民法知識 權利と義務の鉢合せ

二十版

攻むるも守るも法の世の中日中に提灯必要

定價四十錢
送料金四錢

心得た者はヌケ〳〵と法を潛り、知らぬが佛の聽耳に水を灌ぐ、法律なんど面倒臭いと無精をしてると風一匹の事にもハラ〳〵し、人に聞かれても返事が出來ぬ。希くば本書を讀め。內容の懇切はいふだけ野暮屑の凝らぬ文章にあらゆる紛爭の種難題の掛引を一讀釋然たらしむ。

内容の概觀

▲貸た借たが事の始り▲素人の驚くおどかし▲裁判沙汰と物云ふ書類▲訴へられての應戰▲最後の手段もお上の厄介▲差押から競賣まで▲抵當と質入の話▲新らしい借地借家法▲法律の保護に安心せよ▲借地借家の爭議調停

(5) 諷刺評傳 粋な親鸞様

十六版

民衆の宗教
戀愛の親鸞
洗禮の魂が物
をいふ

親鸞はナゼ流行る。彌は茫漠とし、日蓮は骨が折れる。親鸞教は現代的だ。戀もせよ、金も儲けろ、嘘も止むを得まいといふ。弱者の爲の哲學、俗物の爲の宗教だ。諷刺と洒落と妙文に其眞骨頭を穿ち波瀾萬丈の生涯。
讀者の心頭會心の微笑を禁ぜらしむ。

定價金四十錢
送料金四錢

内容の概觀
〔一〕天笠坊サン顔色なし
〔二〕高野聖に宿貸する
〔三〕南瓜のお尻
〔四〕惱めるる秀才
〔五〕中金色
〔六〕草の鞋に竹の杖
〔七〕戀の關所

(6) 納稅知識 知らずに納めてる稅金

二十版

申告も不平も根柢ある知識の上にされよ

強制でない筈の稅金が、嚴重煩瑣な法規によつて取立てられる。其裏を潛らうと惡算段をする者あり、分も分らず唯ブーム〳〵いふ者あり、稅金といへば國家と國民と喧嘩腰なるは淺間し。大身上になると專門の博士を顧問として反問苦肉す、不平をいふ前に本書に依て這般の機微に通曉されよ。

定價四十錢
送料金四錢

内容の概觀
▲國稅徵收の實際▲地租の話▲所得稅の話▲營業稅の話▲相續稅の話▲通行稅の話▲鑛業稅の話▲狩獵免許の話▲間接稅犯則者處分の法▲酒造稅▲醬油と砂糖と石油と織物▲實藥稅とかゝた稅▲印紙稅便覽▲登錄稅便覽

(7) 主婦大學 細君アラだらけ

十四版

諷刺諧謔の中に男女生活の骨頂を穿つ珍書

著者曰く『人の細君をコキおろして此の一卷をなす。寮覺のよき業でもないが、細君方からは恨まれても、天下の良人諸君子からは「よき代辯よ」と煽てられることと必定』と著者一流の諷刺皮肉は天下の細君を滅茶滅茶となしたり。而も根もなき漫罵にあらず、悉く夫婦生活の眞に徹せるもの、女は讀んでくやしがり玉へ。男は讀んで『ソレ見ろ』と痛快がり給へ。

定價金四十錢
送料金四錢

(8) 經濟知識 貧富ロマンス

十四版

活躍的な經濟史話！人皆富むの理想實現へ

貧乏は戀をも乾枯びさせる。いやなものだがナゼ貧乏人がある。金持は腹も減らぬに飯を食つてる。貧富の對抗は經濟史あつて以來、人類爭鬪の活畫面だ。現代を觀よ。プロとブルとがみ〳〵やつてる。これを古今に尋ね世界に究めて、貧富顚倒の經濟史觀を流麗に物語つたのが此本である。貧人も讀め、金持も讀め、そこには開かれざる寶庫の鍵がある。

定價金四十錢
送料金四錢

加藤美命著◆ゼントルマン叢書

(9) 經濟概論 常識としての經濟學

十四版

最も手輕な經濟學入門

經濟學などといふものが一體何をうだ〳〵やかましく云つてゐるのか、あの悠然たる全體系を小氣味よく縮寫して、手取り早く其の全部に通じさせやうと企てたのが此本である。「貧富ローマンス」と併讀下さらば一層よく斯學に通曉せらるべし。經濟は吾等の實生活と最も緊切な關係にあるもの。萬人の御一讀をまつ。

内容の概觀

▲經濟生活と經濟學▲生産と土地の話▲勞働と分業の話▲資本と企業と經濟▲生産事業の選去現在未來▲組合と會社と合同▲價値と物價▲商取引の過去現在未來▲銀行、信用、交通、商業政策▲物議の種の分配論▲地代と利子と賃金利潤

定價 金四十錢
送料 金四錢

(10) 政治知識 天下國家を語る

十四版

比較された列強發達史

國家は常に變遷推移の途上にある。國によつては蛙の目の如く寧ろ變すると雖も近代の國家組織は合理的なる政治だ、曾て選論だといふを要す、新聞學問だけでは頭の中に筋道が立たず根柢がない。これを世界列强の過去現在に尋ね、日本を中心とし國家學の綜寫であり、此卷で愈〻憲法講話である。

内容の概觀

▲國家とは何ぞや▲天下は何人の天下か▲變遷途上の政體▲各國王朝の興亡變遷▲國法上の君主▲憲法の話と天皇の大權▲大實任の歸するところ▲國務大臣と内閣と樞密院▲國會の過去現在未來▲普選論是か非か

定價 金四十錢
送料 金四錢

東洋哲學

老子から王陽明まで

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

〔人間叢書第一編〕

加藤美命著

四十版發行!! (口繪)中村不折先生筆「老孔二聖會見の圖」挿入

讀書界に大波瀾を捲起したる本書を見よ!

疲れ果てた世界の神經が、今一齊に東洋に向けられてゐる。そこには取殘された悠遠の哲學が、太古の森林の如く鬱蒼としてゐる。希くば新しき心眼を開いて、吾等が文化の故郷に遊べ、改造解放、民本革命、超然虛無、あらゆる思想が、二千年前の支那に燦爛として瞬いてゐる。

此一卷、要領は萬卷を壓し、まづ漢學のオヤヂ共の度膽を奪へり、新人も讀め、舊人も讀め!

内容大觀

虛無主義の老子	平和主義の墨子
宿命主義の列子	性惡說の荀子
個人主義の楊子	詭辯の名家者流
超人主義の莊子	法治主義の諸子
哲人主義の孔子	陰陽二元の道教
民本主義の孟子	直感主義の王陽明

【第十八版發行】

〔人間叢書第二編〕

加藤美侖著

改造思想

ルソオから現代まで

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

世界を燒く社會改造の焰の渦の全幅を眺めよ！

社會主義も民本主義も、所謂過激思想も、止むに止まれぬ人間必死の要求を背景とする社會改造の矢叫びである。その源を探れば遠く佛の革命兒ルソオに至るべく、十九世紀から現代へ、蓋世の偉才は悉く其勇ましき闘士であつた。

滔々たる其精神は近代の中心思想として世界の心熱を燃やしつゝある。其全般を懇説した本書は、近代文明に通せんとする人の必讀の好讀本でなければならぬ。

内容大觀

天才兒レソオと革命思想▲佛蘭西革命と改造思想▲デモクラシイの實現へ▲ブルジョアとプロレタリアの出現▲社會改造運動の先驅▲マルクスの學說と思想▲社會主義のいろ〳〵▲社會主義化せる世界▲社會主義思潮と近代文藝及哲學▲レーニンとボルシエヴイズム▲クロポトキンと無政府主義▲無抵抗の革命兒ガンヂ

【第四十版發行】

〔人間叢書第三編〕

加藤美侖著

哲學概論

常識としての哲學

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

嚙み碎かれた哲學大系！現代人の心の榮養!!

芝居の一幕見をするやうな輕い氣分で、いと高き哲學の殿堂を覗きみられよ。古往今來數千年、人類の聖苦に依て築き上げられたる精神文明の絢爛に眩惑さるべし。哲學は學者の玩具でもなければ唐人の寢言でもない。現代人の常識として消化され、心の生活を豐潤にする活學問である。希くば無精を一擲して本書を讀め。何人も滿悅せんと斷言して憚らぬ。

内容大觀

智慧の孵生と其成長▲仲の好い親類同志▲宗教と藝術と倫理學と哲學▲他人のそら似か▲哲學の内容は何だ▲認識論について▲形而上學で云ふ唯物論と唯心論▲宇宙の過去現在未來▲哲學上の人生觀▲哲學の背景となるもの▲心理學と論理學と哲學

【第十八版發行】

〔人間叢書第四編〕

加藤美侖著

近代哲學 カントから現代まで

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

大哲學者の大思想を一卷の活畫として展開す！

思想を談ずる者は一たびカントに還り、其流れに棹して、咲いては散る兩岸の想華を眺めつゝ現代の大哲ベルグソン迄來ねばならぬ。連綿たる哲學思想の脈絡變遷を、一卷のフィルムとして讀者の眼前に投げ出したのが本書である。解說の首尾透徹せる點に於て、ズブの門外漢にも釋然通曉せしむる點に於て晦澁難解に肩を凝らせぬ點に於て嶄然として類書に冠絶する

内容大觀

夢幻的な理想哲學▲厭世悲觀の哲學▲科學に化けた哲學▲兩極端の痛烈な哲學▲個人主義の哲學▲オイケンの精神哲學▲ジェームスの實用哲學▲新東方主義の思潮

【第十八版發行】

〔人間叢書第五編〕

加藤美侖著

近代文藝 ゲエテから現代まで

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

塔に上りて世界を觀よ！然る後に日本を語れ！

此百年ばかりの世界の文壇を見よ。火事場のやうな猛勢さだ。吾等は其燎原の火の全景を眺めむとして終にゲエテまで還つた。それが此一卷である。由來、文藝は文化の反映、時代の先驅である。文藝を控除した世界は燒殘りの骸骨である。血湧き肉躍る近代文明の核心に觸れむとする人は讀め。日本脚下の思潮は其影繪である。本書は之を白日の光に全照した。

内容大觀

ゲエテから出發して▲理想詩人からユーゴーまで▲ソラの自然主義▲セオパッサンを頂として▲デカタンの詩人▲イプセンを中心として▲ドストエフスキーまで▲偉大なりしトルストイ▲群星輝くロシヤ文壇▲十九世紀後半の英米文壇▲現代文藝への傳囘▲神秘象徵主義の新文藝▲耽ヤ派のロイルド▲南歐ッ學の代表ダヌンツイオ▲ロマン・ロオランの英雄主義」

〔人間叢書第六編〕

加藤美命著

比較宗教 世界の宗教を觀る

四六版美本
定價六拾錢
送料四錢

史實と教義より觀たる東西の代表的諸宗教！

世界的な大宗教だけでも六つある。その中にまた宗派が無數にあつて、お互に輕蔑し、敵視してゐる。儒教、道教、印度教、佛教、基督教、回教、それ〴〵の教義と歴史と獨立せる信仰を持てゐる。それが、どう違ふかを比較紹介したのが此本である。一面に於て巧に描かれた世界宗教史であり、開祖列傳であり、公平なる内容批評である。

内容大觀

人間の住む所宗教あり▲儒教と道教▲孔子學と老子學▲印度教▲吠陀學と波羅門教▲釋迦の佛教▲開祖物語と佛教の眼目▲猶太教と基督▲マホメット教▲不思議な回教の力

〔人間叢書第七編〕

加藤美命著

日本文化 吾等の佛教常識

四六判美本
定價六拾錢
送料四錢

千四百年の日本の文化を裏書する佛教發達史

木佛金佛石ぼとけ、佛臭いこと世界無比の日本に住んでゐながら、一向その知識を持たぬは心細い。千四百年の昔日本へ來た佛教が、本家に衰へて日本に榮てゐる次第はどうか。傳教、弘法、法然、親鸞、日蓮、偉僧高僧を排出し、政治的にも、民衆的にも日本のあらゆる文化の基調は佛教にある。其複雜多面な全體を縱横に物語つた本書は正に江湖の感謝に値すべし。

内容大觀

佛様の御入來▲日本の神様と天竺の佛様▲王法と佛法との矛盾▲傳教と弘法▲佛さん達の素性▲法然の新宗教▲親鸞と一遍▲日本の禪宗▲日蓮と法華經▲骨の抜けた佛様

ピツソン原作　矢口達譯　（十版發行）

神秘の女

性に生きんとして子の愛の絆に惱む人生の大悲劇!!

戀の爲に夫を棄て愛兒を置いて走り乍ら忘れ得ぬ子の愛に心を苛まれ苦惱の生を終る悲劇の女の一生を見よ。姦通―流轉―淪落―苦悶―殺人―と而も不思議な運命に支配されて我愛兒の辯護を受く。二十何年間の波瀾の境涯と心理を解剖描寫せる深刻の大傑作。

定價　四六判美裝幀　壹圓八拾錢　書留送料十八錢

發行所　東京市神田區新通石町三四二　振替東京二三三　朝香屋書店

▼出版界の驚異　肉筆口繪入り珍書

肉筆口繪のみにて拾圓以上の價値あり

東海道漫畫紀行

東京漫畫會　會員共著

東京漫畫會十八人は由緒深き旅の詩の搖籠の實狀を世に紹介したい希望に依り去年東海道自動車旅行をした。この册子は其時收獲せし興味津々たる逸物を最適當な版畫と文章に依り同人各獨特の妙筆を揮つて表出したものである。

見よ！大正の新時代に生れたる漫文漫畫の五十三次と吾等が子供の時より廣重の版畫に依つて唄はれ十返舍一九の膝栗毛によつて說かれて子守唄と共に心に浸み込んだ五十三次とのコンストラストの如何に面白きかを！

肉筆執筆畫伯

岡本一平　細木原青起　在田稠
近藤浩一路　服部亮英　池部釣
清水對岳坊　中西立頃　宍戸左行
水島爾保布　前川千帆　小川治平
池田永治　代田敬一　宰田純一
山田みのる　森島直三　下川凹天

特製　四六版、表紙木版摺、美術製本函入
肉筆口繪堅八寸横六寸、極上畫箋級額面用一枚、彩色密畫四色版、凸版（オフセット）五十五圖各畫伯の紀行文約二百五十頁
定價金五圓　送料金十八錢
（肉筆は特製全部に挿入す）

並製　定價金二圓五十錢送料金十二錢
（並製には肉筆口繪を付せず）

發行所　東京市神田區新通石町三四二　電話神田二三三　振替東京二四三　朝香屋書店

青年科學

……（再版）……

全壹冊

四六判洋裝美本
頁數三百廿餘頁
定價金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

著者曰「心理學上或は道德學上の見地よりして「青年研究」とか「青年修養談」とかの書は多しと雖も醫學上より――科學的に且つ物質的に特に青年のみの衛生及精神修養法を說けるは恐らく本書がその嚆矢ならん」と、然く其の思想上、生理上の一大危險期たる青年時代に處して身心安定のバイロットを爲すもの卽ち本書あるのみならん。著者獨特の輕妙平易なる筆に依りて說かれたるもの概略左に摘抄す。

▲青年期の標準▲青年期は人生の危期又落礎期▲青年の皮膚病▲青年の神經系▲腦の使用法▲神經衰弱症▲青年の眼▲近視眼の原因及矯正法▲筋骨强壯術▲飲食物と性慾▲青年の忍耐心を强くする法▲精神統一法▲肥える法と痩せる法▲身長を伸す法▲胃腸病▲青年の心臟▲青年の呼吸器▲胸廓强壯術▲青年の肺結核▲青年

發行所　東京市神田區理新石町九
電話神田二三三、振替東京二四三　朝香屋書店

醫學士　大塚胗三先生著

女性醫學

△△△大增訂五版▽▽▽

四六判　全一冊
裝幀總布美本
定價金壹圓八拾錢
送料　金八錢

本書は女子の月經來潮より閉止に到る間の數奇な運命を面白く說いたもので、殊に性の問題は女子の生涯を通じて最も重大なる事件であるから素人に了解し易からしむる爲平易に赤裸々に解說を試みた。（著者）

◀內容概目▶

▲姙卵はどんな動機で女性となるか
▲姙娠中胎兒の男女を豫知する法
▲破瓜期に於ける女性の生涯
○月經とは何か○どうして月經があるか
○生慾といふものに就て○月經過多並に子宮出血
▲成熟期に於ける女性の生涯
○手淫○同性の愛
▲成熟期に於ける異常現象
○無月經○子宮內膜異常○月經困難○全身性諸病
▲生殖器に於ける女性の生涯
▲姙娠時の生理と姙娠中の攝生並に警戒
▲生殖器分泌液の意義
▲姙娠中の胎生
○飲食物○衣服○住居○便通○運動○睡眠○乳房の手當○授乳○姙娠中の性交
▲分娩の生理と分娩時の心得
○產室と產床○產衣○分娩中の食事○用意すべき器具
▲產褥の生理と攝生
○居室○臥床○精神の安靜○飲食物○外陰部の處置○乳房の處置
▲避姙
▲性慾の時期的變化
▲愛といふものに就て
▲性交による生殖器の損傷
○不姙症○姙娠と子宮癌
▲婦人科手術の效果について

▲婦人醫學書の範として好評賞々▼（外數十項）

東京市新石町九田區　朝香屋書店　電話神田二二三三　振替東京二四二三

脚氣療養

全壹冊

糸左近先生著

四六判美本
正價六金壹圓
郵稅拾貳錢

内容を總論、原因、症候、診斷法、豫後、攝生法、治療法、豫防法とに大別し議論の多は原因は三十段に分けて詳述し症候は本病を五種に細別して何人にも解り易く通俗に講述し攝生法、治療法は古今の說を悉く網羅し新舊藥は一切揭げて之を忌彈なく批判してある。本病者は勿論本病の素因ある人士の必ず一讀せられ徒らに小豆や麥飯、糠等の食物に抱泥せず、速かに其の誤解を覺り一刻も早く健全な心身に復されたきものなり。

發行所　東京市神田區通新石町九
電話神田二二三振替東京二四三　朝香屋書店

シエークスピヤ原作　香山三千男飜案

人肉の裁判

四六判美本
定價　壹圓五拾錢
送料　八錢

十五版發行

飽滿なる肉の歡喜と！
陰慘なる肉の怨怖と！

美しき處女の貞操の運命……大膽にして凄慘なる戀と金との深刻なる葛藤の表裏を見よ……

そこには幾組かの滴るやうな戀愛と性慾の甘き泉のさゝやきがある……

人生の樂園と地獄の腹合せだ……恐怖と歡喜に讀者の心を魅殺せずんば止まぬ。

內容

(一)婿八人(二)戀の冒險(三)仇敵からの借金(四)戀の旅を壽く饗宴(五)金貨を携へて(六)闘髏と阿呆づら(七)憤激、怨恨(八)戀の勝利以下略

發行所　東京市神田區通新石町
振替東京二四三番　朝香屋書店

ヱ2823 稲

太田三郎氏著

金髪の影を追ふて

西歐の國々に古い愛欲の歩みを探ねて、遙かな思ひの旅を續けて來た著者が、其嘱目の廢墟の白日の嘆きと、其追憶の輝きの衣香扇影とを、兩つながら同時に紙上に再現させたものが卽ち本書である。清麗たとへば水草の香氣を偲ばさせる其文と其繪と、加之遺趾遺物の寫眞の寢台化粧筐の微に至るまで洩すことなき珍奇の蒐集とは、讀者をして又自ら其廢墟の石柱に觸れ、其紅恨の息吹に潤はさせずには措かないであらう。

内容

●斷頭臺の上の王妃
●水光綺談
●ジヨセフイーヌ皇后の幽居
●ジユリエツタとロメオの墓
●皇女エリザベスの魅惑
●サンゼルマンの古城
●盲女ニデイア

原色版、凸版、寫眞版等の特技を以て複製した八十八箇の繪畫と創意に充ちた裝幀とが放する其光輝に就ては更に贊するまでもあるまい。而もまた著者が其自畫を自ら繡ひ自ら編みたる毛糸刺繡、フイレ編み等を請ふて之を精巧なる製版に依りて本書に挿入することを得たのは弊店の大に以て誇りとする所である。

東京市神田區通新石町九
朝香屋書店
電話神田二二四三
振替東京三三

四六判ボプリン表裝
定價金三圓
送料十八錢

515
32

25 8 19

終